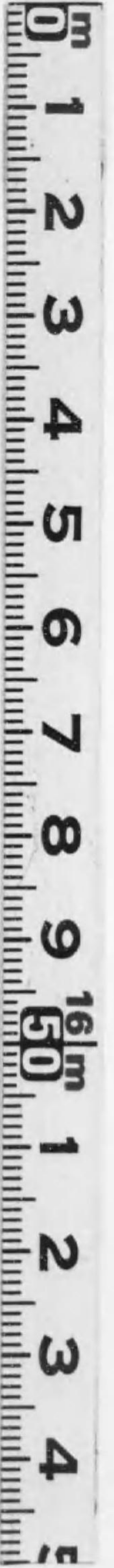


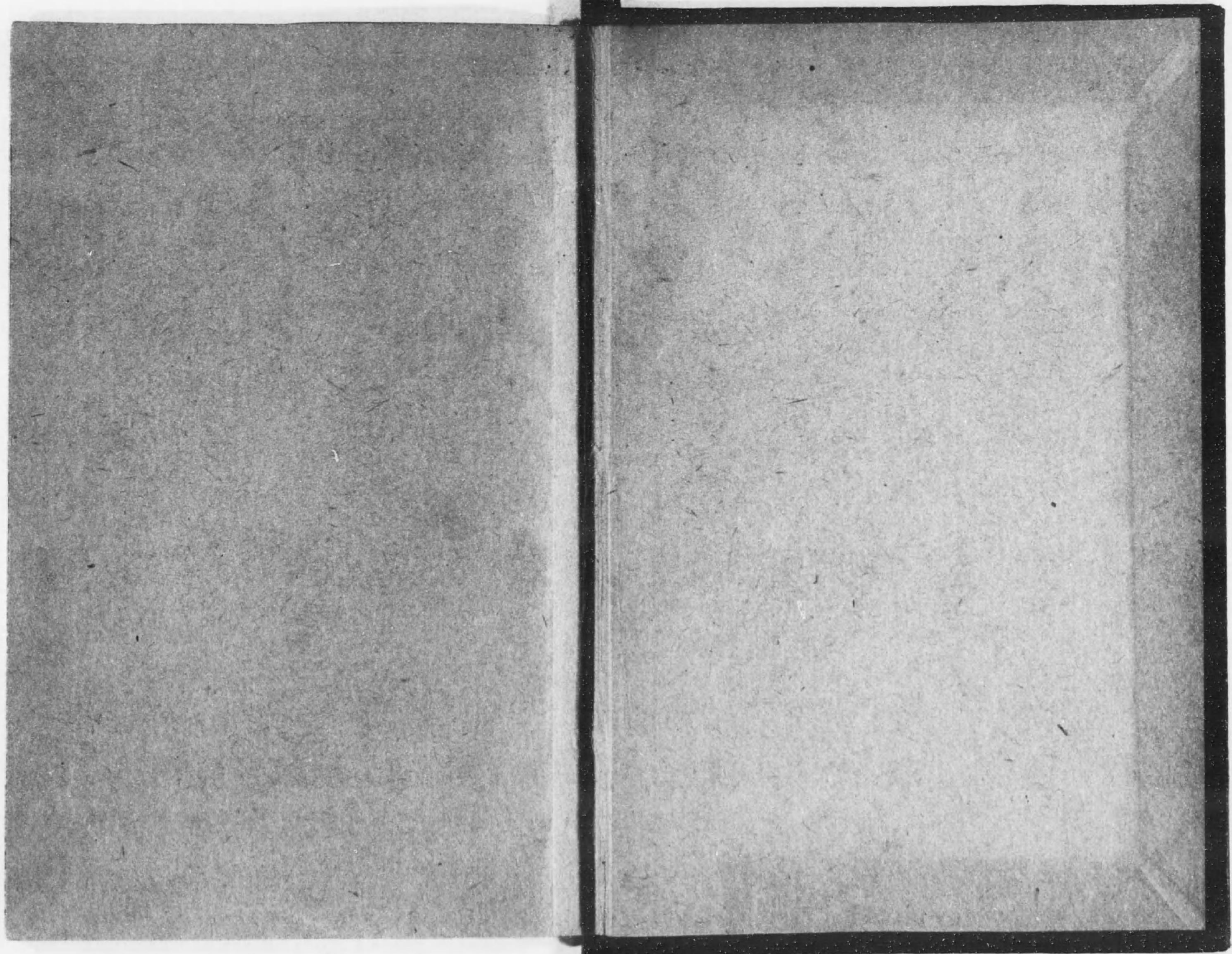
516  
311



始









GOD INCARNATE

BY VISCOUNT NICOLAI

露國前子爵ニコライ原著  
田島進譯

基督神性論

大正

14. 5. 14

內交



基督教興文協會の事業は、日本の基督信徒及び未だ基督教を信ぜざる人々の需要に適したる基督教文學の著作及頒布にあり。本協會は日本に在る基督教ミッシヨンの同盟を代表せるが故に公同的精神を以て立てるものなり。されば本協會の會員及び維持者は必ずしも本協會に於て發行せる書籍に現はれたるすべての意見に同意せるものと認むべからず。

## 英譯者の序文

この小冊子は令名ある一露國人が露國大學生の乞ひに應じて物せられた基督教神性論に關する一つの講演を藏してゐる。この講演の眞髓は人生の行路難と戦ひつゝイエスに従つた人の信仰的實驗から出でゝゐる。何となれば著者の執つたイエスに對する態度は彼の周圍の人々には殆んど膾炙してゐなかつたからである。またこの講演の價値はイエスキリストの宗教に就き熱心にその推論を辿り、捕はれざる研究を爲して、遂に彼れを教主とも主とも仰ぐに至つた懷疑的



な幾多の大學生が實證してきた。

如何なる社界的團體にせよ、將た亦特殊の民族にせよ、基督の人物を理解するに於て、其獨占權を所有するは不可能の事である。基督の使命の普遍妥當性は、時勢の變遷するに従つて、イエスと人類との間に新なる接觸點の發見せらるべき事を確實にしてゐる。其故に一個の教養ある露國の基督者が在天の基督に對する其信仰的體驗を、英語による讀者に會得せらるべき形式を備へしむるは蓋し最も時機に適すると思ふ。

英語に附するに當り、原著者自ら直接指導の勞を取られたるが故に其原意を傳ふに正確であると思はれる。

### 人と爲り給へる神

吾人の中、思慮ある者ならば、その生涯の何時か或時機に於てイエス・キリストの卓越した人格の前に深き感銘を以つて立たない者は殆んどあるまい。如何に秀絶した聖潔さと崇高さを以てキリストは吾人の眼前に現はれることであらう。過去十九世紀間、諸國民の文化的發展に於てキリストの人格及教訓の直接、特に間接の感化に至ては其影響の如何に莫大なるかは、吾人の容易に識る事の出來ない程である。



然し、之に反し吾人が、福音書の記事を、先入主的感化や、傳統的信仰に捕はれずに不羈獨立の精神を以て讀むならば、其中に、イエスの傳に關し如何にしても不當であり又在りうべからずと思はしむる幾多の事柄の記されて居るのに疑懼せざるをえない。

キリストの超人的出生の記録や、或は奇跡の諸點や、或は彼の死と復活の事など、一體如何様にこれ等を觀ればよいのか。亦彼の生涯の超自然的方面を、如何様に考ふべきか、特にキリストが神の子なりと云ふ根本問題は如何、大多數の人にとつて以上の諸問題は、辛悚悲痛な問題を惹起して居る。自然に起り來る問題は、即ち斯の如き事が眞實なりやと云ふ事である。凡ての人間は皆自然的方法で

生れ、無論、奇蹟などは行はない、死んで再び甦る者でもない。人類の全歴史中の此普遍的法則に唯だ一の例外のある事を許す事が出来るか。それは不可能ではないか。自然界は、何事も皆一定不變の法則によつて進行する。奇蹟とか、超自然的現象などは起るものではなく、亦あり得べきものでもない。自然科学は奇蹟の考を許さない。キリストは我等の如き人間で、只人間中の最善なる且つ最も完備せる人であつて、彼が奇蹟を行つたとか、死より甦つたと云ふ凡の記事や、凡て福音書中の超自然的方面や、キリストが神の子であること云ふなどは、皆昔噺で、後世の稗史であると主張する方が遙に妥當ではなからうか。其の上に、一體斯る問題の爲に時間など費やして



何の價値があるのか。吾人は既にキリストの教訓を有する以上、特に彼を神の受肉せる者と観るも、將た亦一個の人間と観るも其間に、何等の逕庭がないではないか。

大抵の人々、特に教育があり、亦才幹のある人々でも、斯様な議論で満足する程の淺薄の者がある。彼等が如上の問題に就て、新聞なり雑誌なりの論文を読み、特に名聲高き著者であるルナンの様な人の説を読むと、キリストの神の子であるか、ないかの問題は既に決定的に解決された者だと本統に信する様になる、勿論其解決は、神性否定である事は云を俟たないのであるが。

恐くは、この小論文の爲に、或る人士は、吾人の主張する「人の

子」の問題は最初に豫想したものより更に意義の重大なものである事と、且つ少くとも、教養あり、思慮ある人々には、近世科學の立場から觀て、是の問題が未だ充分に、決定せられてゐない事が會得せられよう。



## 奇蹟はあり得べきものなりや

六

教育あり、思慮ある人々が奇蹟に關する事を聞くと懷疑的の氣分を持つに至ると云ふは當然の事である。輕々しく容易に信ずる風が抑も多くの人をして誤らしむる基となつた。さは云へ、吾人は他の極端に走つて、吾人に理解出來ぬこと、亦説明しえぬことを云ふて、直に之を奇怪視したり、或は否定したりすべきではない。

ピュヒネルがよくも曰た如く「我等に其物を説明する事が出來ぬからとて其を不可能と考へるのは、畢竟其人の無智の自負を示す」と

は儘かに其通りである。經驗の乏い素人學者は、何の苦もなく自己流の論法を用ひて、斯の如き事は絶対にないと云ふ斷案を下さうとするが、眞の學者は常により細心な方法で結論を導くものである。彼は科學が實際研究し、亦解釋する所の象現の範圍は、寧ろ極めて一小部分で、現在に於てすら、眞の科學の裳裾の端にふれたに過ぎない事を明瞭に心得てゐる筈である。

且つ亦所謂「正確なる科學」と雖も、其根本には證明する事の出來ぬ假定の上に立脚して居る事を能く記憶すべきである。數學の公理でも、信仰によつて認められる公理の上に立つてゐる。物理學に於ても、何人も未だ嘗て見たことのない分子、或ひは電子と云ふもの

七



の存在を信せしめようとしてゐる。吾人はそれ以上分解する事の出  
來ぬ單位の存在を想像する事さへ出來得べきか。吾人は光線を説明  
するに宇宙のエーテルの波動を以てするけれど、果して其エーテル  
なる者が實際存在する者であるか、是も亦適宜な假説ではあるまい  
か。電氣とは抑も何であるか、其すら我等には能く解らない、其く  
せ毎日其を使用してゐるのである。

所謂「超自然的現象」はあるものでないと、之を否定する理由は、自  
然界の不變の法則と相容れないからだと云ふ、所が英國オックスフォ  
ルド大學に於てロー博士の辨證學上の講演（基督教の自明的眞理）  
の中に尤も能く之の點を辯明して居る。博士の説く所によると、自

然界の法則と自然界の勢力との二者を混同してはならない。自然界  
に於る現象の原因である勢力、例へば、引力とか、遠心力の如き力  
は、之に反對する力と相ひ衝突する迄は何所までも其活動を止め  
ない。之に反して、自然界の法則の場合は、其は自然界の現象に於  
て觀らるゝ一定の規則正しき結果を指してゐる、例へば、水は寒暖  
計が或る點迄降ると氷結し、亦物體は暖氣の爲に膨張し、寒氣の爲  
に收縮するが如きを云ふのである。

然し乍ら、斯の如き永久不變と思はれてきた法則に例外のものが  
ある。ラヂウムとその驚くべき特性とが發見された事は、科學に如  
何なる革命が起たかは、吾人の記憶すべきことである。其發見に對



し最初、科學者等は、懷疑の目を見張つた者だ。キューリー夫人の發表に對し、彼等は肩を縮めて嘲笑したではないか、然し夫人が終に勝利を占むるに至た。實驗の結果今迄の學說が棄てられ、新なる學說が主張せらるゝ様になつた。

抑も吾人は自然界の諸勢力の凡てを知り盡してゐるであらうか。自然科學は後から後へと、今迄知られて居なかつた目に見えぬ強力なる光線や耳に聞えぬ音響や、ある物質中の漸新な放射性等の驚嘆すべき新諸勢力の存在を證明してゐる。約言せば我等の祖先の夢想もせなかつた元素や、勢力が逐次發見せらるゝではないか。斯る不斷の發見は何時其終局に達すのか、比較的「超越せる勢力」が漸次

光明に齎らされ、最初に於ては殆ど不可解とせられた、幾多の現象が今では充分に説明せらるゝに至つた。

今から百年前、佛國の或る學者が、支那へ通信して半時間以内にその返信を受取る事の出来る様な發明に従事したと發表した。所が其學者は世人から嘲笑を受け、狂人視された。人々は、よしや騎馬で日夜休みなく馳せても、亦船で不斷の追風に帆走し、何等の故障なく順潮に行くとしても尙ほ數ヶ月は慥にかゝると尤もらしく論じたが其議論は寧ろ當然で決して陳腐ではない。然し其學者は電信の元則を研究してゐた。電氣なる者は當時既に世にあつたが皆其に關する智識が乏くて其利用方法を知らなかつたのである。數百哩を隔



て、電話で通話したり、レントゲンの光線で、密閉した箱の中の物を寫真にとる事に就ても同様の事が言はれたに相違ない。

勿論嚴密なる意義から論ずれば、奇蹟とか、超自然的現象とか云ふ者は存在しない者だと曰ひ得る。何となればどの現象も必ず或る既存の原因の結果でなければならぬから。さり乍ら教授ハルナック博士（マス、ベツセン、デスクリステンツカムス）がよくも曰た如く「なる程奇蹟はないかも知れないが奇蹟的のものは多い」。而て吾人の知らない勢力や、動力が今尙は如何程存在して居るか解ない。それ故事實の可能、不可能に就いて輕々に斷定し得る者ではない。

敢て問ふが、新なる「超越せる力」の發見は所謂物質的現象にのみ局限さるべきか否や、其が道德的心靈的現象の内にも存在して居らざるか。ハルナック教授は云ふた、「物質的勢力に關しても吾人は凡てを識る事が出来ない。況んや心靈的勢力に於てをや」と、彼は更に語を繼で曰はく「故に過古の奇蹟を論ずるに於ても、以前よりは、餘程慎重な態度を取らなければならぬ」と。

一體、自然界と、超自然界との境界線は何所にあるか。何所に自然界が終り、何所から超自然界が始まるか、兩者の間を判然と區別する事が出来るか。到底其區別は爲し得らるゝ者でない。特に科學的立場から觀れば「超越力」はるものがあるか否やと云ふ問題に歸着するのである。



大抵の批評家、例へば、ダビッド、ストラウスとか、ルナンとか其他の者が、キリスト傳を研究した時分には、一種の色眼鏡を用ひて、彼等に、超自然と見えた者は、先天的にあり得ない者と、初から決めてかゝた。其だから自分達に都合のよい様に福音書を改竄した。其から亦、ハルナック教授の如き人々は、盲者や跛者の醫せられた奇蹟は事實と信せられても、他の奇蹟は信せられないと云ふ矛盾した議論を爲した。抑もこれを科學的のものとする事が出来ようか。

キリストが奇蹟を行ひ給ふや、聖靈の力即ち神の力（馬太傳十二ノ二十八）によると宣給ふた。吾人は聖靈に就ては今日に至るも其識る所が尠い。其にも係らず、キリストは是の事は能く爲し給ふが、

かの事は爲し能はないと斷定を下し得ようか。既に或る恵み深き力の働で驚くべき變化が或人に起り來るを實際目撃することがある。然しその恩寵の力の性質は如何なるものであるかその大部分は知る由はない。

斯る問題の研鑽に於ては願くば、我等が眞理に對する眞正なる學び人、忠實なる探究者でありたい。輕舉妄信の人でもなく、亦偏屈でもなく公平無私の心掛を持ちたい者だ。見界を廣くし、眞理ならば、何時にても受け入ることの出来る人となりたい。其眞理がどこから來ようと、假令それが爲に今迄大切に思た自分の學説が覆がへされ様が、或は自分の先生が反對しようが、或は科學圖書館に其本



が備へ付けられなかつたが、眞理でありさへするならば、豁然として其を受け容るゝ人となりたい。

希くば、以上の様な心掛で基督の人格に近づき、之を研究したい。福音書を読むと何となく、書かれた事が誠でない様な氣分が、可なり強く感じられるが、其の爲に斯の如き事實はあり得ないと曰はれ様か。按ふに、我等は基督に於て「最高級」の自然能力に遭遇してゐるのである。「最高級の」此能力とは今迄は不可能に見へた事實を可能ならしむるものである。

福音書中に記載せられた奇跡が、可能事か否やを決定する前に、先決問題として基督の人格の各方面をば科學的研究に當て嵌め、充

分に是を審査するが必要である。若し其研究の結果、基督の神性とその可能性はあり得べき事と判れば、既に論じた理由で、所謂奇蹟なる者が我儕に取て左程困難な問題とはならなくなる。

科學的研鑽とは、第一基督に關する知識を網羅する必要上其材料を審査する事、第二吾人の基督を知る範圍に於て彼の人格を研究すべき事、最後に、基督の神性に對し之を肯定するか或は否定するか吾人が態度より、論理的に當然に着すべき結論に達すべき事である。

我がロシアに於ては、教養ある人士とてもその大部分は、キリスト教の資料に就いては知る處が乏しい。福音書中にゑがかれたる基



督の人格を獨創的に研究する者は寧ろない。大抵の人は間接に人の助によるか或は書物から學ぶに過ぎない、亦キリスト神性の肯定及否定より起り來る其結論に考慮を拂ふて居らない。従つて、大多數の者は眞實堅固の確信を持って居らない。又福音書中の難問題に遭遇するか或は不意の反對説にでも遭遇すると、忽ち自分の立脚地を捨て、退くのだ、其結果如何は敢て願慮する所ではない。

尙ほ更に記憶したい事がある。其は斯様に複雑で範圍の廣大な問題に於ては單純な議論や、或は數段に渉る議論位では最後の結論に達しえないとの事である。得らるゝだけの論證は集め、推論といふ推論は、悉く考慮する必要がある。凡ての肯定と否定との議論を悉く集めて之を綜合比較するにあらざれば、何れが眞であるか判断に窮しよう。是の點に於て我儕は正直で且つ誠實でありたい。眞理は光明を恐るゝ者ではない。



## 福音書は正確にして信頼するに足るや

ルナンは彼れの基督傳の中に「基督教が構成せらるゝに三世紀を要した」と書て居る。而て其結論で吾人の有する最も古き福音書の原本(Codex Sinaiticus)は紀元後三百五十年に書かれた者だ。それゆゑ基督の奇蹟や、神性に關する凡ての物語は、彼の死後、初の數世紀間に創造された者に相違なく、實を云へば、キリストは普通の人間で特別に理想の高い人であつたとするが當を得た様に思はれると論じて居る。是の主張はレオ・トルストイや其他多くの人々の容るゝ

所となつた。

ルナンの云ふ如く、最も古い福音書の原本の發見されたのは紀元後三百五十年になつてゐる。それゆゑキリストの十二使徒の内以最後迄生き残たヨハネが死んだ時から、充分二百五十年を隔てることになる。さりながら我等の有するギリキ、ラティンの優秀なる古典中の何れが、その確實性を論外とされてゐるであらうか。エスキラスは紀元前五百二十五年より四百五十六年迄生存した、所が彼の書いた書物の一番古い原本はキリストより十一世紀の後に世に出て居る、其間に千五百年の隔がある。ソホクルスやツキディデスやヘロドタスの書物の事を考ても其等の年代の隔は略ぼ同様である。ヴァー



デルの方は大方三百年、タンタスは七百五十年間の隔がある。其故年代の隔の點から云へば福音書の原本の方が以上の物と比較して餘程よい方と思はれる。其より更に古き福音書の原本のない譯は下の如き事實で大抵は證明出来る。羅馬皇帝デシアス及びダイオクレシヤンが基督教徒に殘忍なる迫害を加へた當時、特に命令を下して基督教の書物を悉く破棄させた、其はキリスト教の信仰が固持され亦宣傳されるのは其書物の存する爲だと思はれたからである。殆ど三世紀間に渡る迫害の中で大冊な羊皮紙の原本を隠匿すると云ふ事は實に容易の事ではない。現今吾人の有する状態で紀元三百五十年以前既に福音書が存在してゐた事は其當時より遙か以前の時代に他の

人々の書た可成に確かな書物によつて説明することが出来る。其等の古本の内に福音書からの引照や抜萃が記載されて居る。参考として福音書から引證された所は、福音書中の主要事實である事は一驚を喫せざるを得ない。論より證據、改宗前は異教の哲學者であつたヂャスチン・マーティルの紀元後約百四十年及び百六十年に出た二個の辯證的論文が今尙ほ存在してをる。其は羅馬皇帝アントニヤス、バファイアスとマークス・オーレリアスに奉つたもので、其れに基督の傳及教訓と其當時の基督者團體の狀態が録されてゐるが福音書を參考したり其から引照して居るのは甚だ興味深き事である。彼は「クリスチヤンが日曜日の集に於て使徒等の傳記を讀んだ」と記載してゐ



る。約十數年前エヂプトでジャヌチンの弟子のタシアンの書いた書物が發見された。其書かれた年代は紀元後百六十年前後の頃で、其書き形が共觀的福音書對照の方法で凡て四福音書の一致して居る事を示してゐる。

福音書の參考された事は是の時より餘程以前の著者等の書いた書物、假令はローマのクレメントの書物(紀元九十七年)その他に既に存してゐる。然し差當り聖書研究の特別範圍迄入る必要を認めない。是の問題ではハルナック教授指導により獨逸近時の自由神學派の主張した見解を適用すれば其で充分だと思ふ。彼等神學者が批評的研究の方面で其等古文書の一字一句も忽にせないで一々審査した事は説明せずとも自明のことである。

獨逸に於ては十九世紀の中葉、バワー教授に導かれた神學のチュービンゲン學派と稱する連中は、新約聖書の大部分に就いてその確實性を否定した。所が爾來科學的研究法により研鑽に研鑽を加へた結果、此派の主張の誤謬が發見され、現今では、獨逸の自由派に於ても四福音書中尠くも三福音書と、一冊を除く外の書簡全體の確實性は科學的に落着したものと考へてゐる。自由學派中の最も極端な代表學者でもパウロの書翰中の次の四書即ち羅馬書、コリント前後書及びガラテヤに關しては秋毫も疑はずして之を正確な者と認た。其では等の書翰文はパウロが紀元後六十年より七十年の間に書いた者だ



が、其内に基督教の重大な教義が悉く藏されて居り、就中、基督が死より甦りし事實や彼の神の子たる事が明かに教へられてゐる。小亞細亞、ギリキ、イタリー其他基督教會のある所は至る所、皆其教を信奉した。其故に斯る重要な基督教の教義は後世に至て創作せられた者でなく寧ろ基督教原始時代より起た事は確實なりと云ふべきである。紀元第一世紀中六十年から七十年の初期に於て地中海周圍の諸教會は既に基督の奇蹟と復活及び神性を信じてゐた。是の事實に照すと是等の教義は皆、後世の作なりとのルナンの學説が悉く敗滅の運命に達することになる。是以外にルナンは基督教原始時代より基督教會到る所で復活祭が守られ、其日の信者の一定の挨拶は「基督は甦り給へり」と云ふ否定の出來ぬ事實のあつた事に氣が付かなかつた様見へる。是の風習の起原は如何に、何に據て之を説明しようとするか。

福音書の記事の正確と眞實とを信するに至るは如何なる標準によるかと云ふ問題を考慮する必要があると思ふ。其最初に先づ、福音書中で何れでも其一書が本統の者である事が判れば従つて其著者を誠實であり、亦其記載した者が大部分正確な者だと賛成する事の出來る有力な論據を造るに至るのだ。キリスト御自身の弟子の一人で第一福音書を書いたレビや、使徒ヨハネ、亦使徒パウロの伴侶であつたルカやマコが事實でもなく信する事も出來ぬ事柄を記載したと想



像するのは困難に相違ない。福音書の記事の眞の調子が斯る豫想に矛盾し又、其記事が如何にも中庸を得て居り亦飾りのない單純の者である事が、著者の誠實で且つ信頼すべき者だと云ふ氣分を起し、偏見のない讀者は不知不識の間に、著者に信頼を拂ふに至る事を實驗する。初め懷疑的態度で福音書を読み始めた多くの人々が讀むに従ひ其記事の調子が如何にも眞實で模倣し難き爲め、終に其疑念散じて之を信するに至る。他にも其正確なるを證明するものが福音書中に至る所に散在する些小な事件の中にある。特にマカ傳に於て然りだ、そう云ふ細目は實際に之を目撃した者でなければ注意の出來ないもので決して後世に至て附け加へなど出來るものではない。以上

の議論が果して力ある者か否か判斷して見たいと思ふならば、公平なる精神を以て、自身で福音書の記事を精細に研鑽する事が最も大切である。

ハルナック教授は左の如く曰つた、「福音書の特質を観ると如何なる疑惑をも抱く餘地がない、其表現の單純で然も力のある事よりして到底比較的短日月の間でも複製などの出來る者でない事が判る。其だから其の記事が基督教原始時代の傳説たるを疑はない。」福音書の正確を證明するに足る尙一の論據がある、其はグリーンキ、ゴトル、エヂプト、ローマ、パレスティン、及び北アフリカの諸國にある福音書が期せずして皆同一の事を記した事だ。蓋し其で諸教



會が福音書の最初の原文の保存に苦心慘憺の跡を見る事が出来る。然るに或る種の人々は曰ふ「是等の福音書の中には誤謬や矛盾が澤山ある。特に一方に偽書と呼ばれる一種の福音書がある。其の中に粗野な、奇怪千萬な話などのある爲め夙に排斥され偽物とされてゐる。後者の福音書を斥け前者にのみ多大の信頼を置くと云ふは抑も如何なる理由によるか。」吾人の有する福音書中に誤謬もあり亦齟齬のありと云ふ事は事實である、然し能く研究したる人はそれらのうちに誤謬や齟齬が「澤山」あるとは云はないであらう。

假令ば馬太傳に於て基督に關する一預言が(馬太傳二十七ノ九)預言者エレミヤに歸せられて居るが其は反つて預言者ゼカリヤ(ゼカ

リヤ書十一ノ十二、十三)に歸すべき者だ。更に著者の一人はガダラの國境に於てイエスが鬼に憑れた二人を醫されたが、他の著者は同じ事件を記し乍らたゞ一人として居る。ヨハネ傳に據るとマリヤがイエスの頭に油を注ぎしは受難前一週間として居るのに他の福音書の記事には受難の前日の出來事として居る。第一第二福音書共イエスと同時に傑刑に就いた二人の強盜が一緒になつてイエスに悪口を曰つたと書てあるが、ルカ傳では一方が悪口したのを他方が戒め且つ自分の罪を悔いたとある。

原文にある是等の齟齬が果して福音書の記事に重要な位地を占むべきであるか。基督の神の子たる事、彼の復活、其他大切な教訓や、



彼の生涯に於る重要な事件等に就いては類を一にして諸福音書は完全なる一致符合をして居る。重要な事は如何なる點に於て何一つ矛盾を發見する事は出来ない。出来ないのみか反對に不必要な細目に於ける區々たる相違は寧ろ是等の記事の信頼するに足るべき間接の證明になるのではないか。

若し福音書が後世の編纂による者ならば此の詐欺の著者達は斯る矛盾を取去り編纂の「合せ目」の解らぬ様意を用ひたに相違ない。記録中に多少の差違の起るのは止を得ざる者で、同一なる事件でも人が異なつたり、場所や時が同じでないも兎角其記事に相違の點が起り易い。假に最も信頼するに足る新聞通信員の數名が同一な事件、

假令ば火事の件を報告したと假定して見る、彼等の報告は徹頭徹尾符合するとは云へない。我等の福音書にしても、皆な同じ年月に記された者でなく第一世紀の七十年から九十年の間に亘り特に約翰福音書は同世紀の末葉に出来たものであるに拘はらず矛盾の點が割合に尠く且つ輕微なるは寧ろ不思議な位である。

典外福音書即ちバルナバ福音書、エノク書、使徒ペテロ黙示録や其他に關しては、吾人は其内に記された荒唐無稽な記録——假令ば幼少なる基督が粘土で鳥を造ると其が本物に變つたなど云ふ事——をはなれて、尙その奇怪なる事を書いた眞の調子は福音書の謹嚴な、穩かな、眞面目な調子に比べて逆も比較になどなる程の者でない事



が能く判る。典外書を最近に翻譯した學者の一人であるビー・エイチ・クワバトが曰ふに「自分が翻譯に取掛らない前は是程とは思なかつたが愈々翻譯に従事して見ると四福音書と典外書との懸隔の甚しきを今更の様に認識した。」と。

基督の人格とその生活に關し研究の他の材料としては紀元一世紀及び二世紀の多くの基督教學者の書物を指摘するが、當然であるが其はこの論文の目的の範圍以外に渉るから中止する。

以上論じた點より觀て、諸福音書なる者は其宗教的の意義は暫く措き、單に歴史的材料としても其價值甚だ多く、亦科學的見地より觀ても信用するに足る十二分の程度の者だと斷定を下して異議はあ  
るまい。是等の福音書は其中の事件に逢遇し之を目撃した人々か然らざれば其目撃した人に接近した者の書た書物であつて決して謀らんで書たものではない。



## 基督の人格

誰でも基督の人格に就てたしかな理解を得たいならば最上の材料即ち福音書其自身を研究する事が一番大切な事で、他の多くの學者等が基督に關し著した書物を読む丈で満足してはならない。

基督の言語、行爲、教訓、品性、死等を研究する時は虚心坦懐の心掛を持ち、豫想した考を懐くべきでない。只公平な研究のみが眞理を熱心に追求する人を満足せしむるものであつて、必ずしも哲學的論證によるのではない。

第一に起つて來る問題は、基督は眞實に生存せしや、彼は果して歴史上の人物なりやと云ふ事である。彼は多分實在しなかつた、實在したとすればホーマーのそのの如き疑はしいものであらう。ペトベルは其演説の内に「神話的基督」と云ふ言葉を用ゐて居るし、ヘッケル教授(世界の謎)は基督の歴史的存在に疑念を發表して居る。

基督が歴史的人物であると云ふ事實に對しては基督教徒のみならずユダヤ人も異教の學者等も其を證明してゐる。假令ばタシタス(ローマ皇帝年代記)が基督者に關する記録中に「多くの人々は基督者の惡しき行爲をにくんだ、是の宗教の開祖の名をクリスタスと云ひ、タイベリヤス帝の治世中、總督ポンテオ・ピラトに由りエルサ



レムに於て死刑に處せらる」と記して居る。この他ローマの學者達も亦基督教及び其開祖に關し記録した者がある。假令ば明瞭なる基督教迫害者たるセルサス（紀元後百八十年頃）、ルシヤン、スエトニヤスや亦トゥラジャン帝の友人で博學を以て聞えたるブリニーの如きである。

ブリニーが皇帝（紀元百十二年頃）に奉つた書中に「基督教者の罪とはたゞ、彼等が一定の日に相集合して基督を神と崇め、且つ虚言せず、盜せず、亦姦淫しないと云ふ堅い契約を結ぶ事である」と記してゐる。ユダヤの著述家中タイタス皇帝の友人たりし大歴史家ジョセフ・フラビヤスは、バプテスマのヨハネの事や基督と其弟子等の

事などに就いて書いて居る。又タルムド書（千八百九十一年にベルリンに於て出版されたダルマン教授の註のあるハインリッヒ・ライレの「タルムドに於るイエスキリスト」を見よ）を觀る事も興味深い者だ、それは無論反對の精神で書かれたのであるが、基督と、彼の母や、弟子等の事に就いて四十回以上の記事がある。又基督が奇蹟を行ひ給ふた事が記されて居るがそれは惡靈の行爲であると記してゐる。要するに、基督の歴史的存在は眞面目な科學上の疑問となり得ないと誰れしも斷言が出来る。

吾人は新約聖書中に描寫された基督の人格を研究する冒頭に於て先づ第一に注目すべき點は、馬太傳に書て居る基督は、馬可、路加



の兩傳中にある基督と同一なりと云ふ事である。勿論ヨハネ傳には他の福音書にない基督の教話が記されてあるが、約翰傳の基督の人物は他の三福音書中の人物と同一だ、是の點に關しては四福音書の間に何等の相違はない。

次に注目すべきは、四福音書中に畫かれた基督は、純然たる人間であつて決して、諸々方々から得た物語を拾ひ集めて造つた生命のない細工ではない。吾人は基督に於て活た人物を観るのだ。生活し給ひ、考へ、感じ、働かれ、悲まれ亦喜ばれた基督を観る。若し是等の福音書が或る學者の想像する様に、年代も違ひ亦著者の違つた色々の傳説の集合された者ならば、斯様に生氣ある人物を観る事

はごうしても不可能である。宛がらラファエルの畫いたシスチン・マドンナの如き美術の傑作は幾人かの美術家の手によつて造られたと云ふに等しく、不合理の話と云はなければならぬ。

翻つて、福音書にあるが如き基督の描寫は或る一人の天才的著者の捏造物と觀た所で、更に疑問が自然と湧て來る、即ち基督の様な人物、其品性、其教訓、其思想、其行爲を斯く迄に想像し得た其人は誰かと云ふ事になる。誰でも人間と云ふ者は其人に近づけば近く程欠點が見える者だが、基督は反つて其反對に、彼の人物と其品性を研究する事が進むに従ひ益々、其高さ、聖さ、完さが愈々明白になつて來る。



先づ比なき山上の垂訓（馬太傳五章より七章まで）を念頭に置かふ。その中に彼は吾人の目前に崇高深遠なる精神的地平線を展開して、たゞに行爲のみならず、思想、想像及び感情のうちに潜む罪惡を披瀝してゐる。或は最も罪深き墮落者（ヨハネ八ノ三、ルカ七ノ三七、一九ノ二、ヨハネ七ノ七）に對する基督の無限大の愛を想ひ見よ、或はかの驚く程深く且つ活ける比喻を想へ、試に放蕩息子の比喻（ルカ十五章）を見よ、如何なる罪人でも悔改めて天父に歸依するならば天父は其罪を宥し給ふ恩愛深き是の話は、讀む度毎に常に新鮮なる氣分を味はされるではないか。又彼の弟子等の足を洗ひ給へる如き（ヨハネ十三章）測る事の出來ない基督の謙遜を觀よ、或は又

現時に於てさへ、普通の見解を超越せる、彼の教義上の見識（ヨハネ四ノ二一—二四）の高邁、無邊際なるを觀よ、或は基督は如何に深く人心の心理的知識に富みたりしや、而して人の罪（マコ七ノ二〇—二三）の源と其中心は實に斯の如しと正確に示し給ひしを觀よ、「天に在ます我等の父よ」と教へ給へる主の祈禱を想へ、誰か能く斯の如き祈禱を創造し得ようか、彼の弟子等の爲に捧げられし最後の祈（ヨハネ一七章）、十字架上に無殘にも懸られし時の最初の御言葉（ルカ二三ノ三四）、或は昇天に際し弟子等に語られし別辭を想ひ回せよ、是の世に於て誰か能く斯る基督を創造し得ようか。更に基督の品性に他の一面がある、それは古今獨歩、未だ其比を見ざる所で



即ち基督に罪なしと云ふ事である。彼は一言の罪ある語を語られず、又疑點を附せらるゝ様な一點の行爲もない。彼自身に秋毫たりとも罪の自覺があつたとは思はれない。従つて彼自身は罪の宥を死の瞬間に於てすら必要を認めなかつた。通例人間は死に臨むと彼の良心が覺醒し來り従つてその妄想は離散する者であるが。

「汝等の内誰か能く我を罪する者ぞ」(ヨハネ八ノ四一六)とは基督の外に誰が云ひ得るであらう。罪ある人が如何でよく罪なき人物を創造し得るか。論より證據、異邦の神々を觀よ、彼等は人間の通りに情慾や弱點を充分具備するではないか。佛陀すら決して自己を罪なき者とはし給はなかつた。マホメッドは臨終に於て、彼の罪を悔い

神に向つて其宥をひたすら祈られた。基督と比較して其點がどれ丈異なるか。他の多の人々は基督に接觸(ルカ五ノ八)して反つて己が罪ある事を識るに至るのだ、現時に於ても昔の様に、多くの人は基督の教を聞て罪の自覺を持つに至る、所が基督御自身はと云ふに、彼の良心の敏感さは誰よりも優れて居るにも係らず、秋毫も自己に缺陷のある事を意識せず亦一度も神の宥を求め給ふた事がない。

此の論文の限られた内で基督の人物を、四方八方から詳細に研鑽する事は不可能である。然れど人間の徳の其最善、最高の者が基督の人格中に顯現されたと云ふ事をば自信を以て斷言する事が出来る。又我等の注意の中心點を何所に置くとも、或は崇高なる彼の道



徳律に置くとも、或は彼が卓越せる神觀に置くとも、何所から觀ても基督は我々人間の到底及ぶ事の出來ない、遙に超越せる完全なる人だと云ふ思想を持つに至る。シヤッフ教授は是の點を能く説明した（歴史の驚異たる基督）、吾人は彼の品性中に徳の充實せるを觀るに止らで更に諸徳の完き均衡と調和を觀る。彼の不拔の精神は頑強とならず、彼の善意は感情的に流れず、彼の節制は決して自己の苦行に變らない。彼は神に向つての熱心に加へて人間の窮乏に對し無限の同情を持たれ、罪人に向つての恩愛は罪に對して一步も假借しない嚴格と平立し、勇敢は先見の明と調和し、牢乎として抜く事の出來ぬ堅き精神は驚くべき柔和と溫柔とを調和してゐる。基督は未だ

嘗つて人間の評價を誤られず、反つて眼光人の肺腑に徹して、一度も外見の爲に欺かれた事がなかつた。質問に對する基督の解答は至れり盡せりで、其以上の答辯はあり得ぬと云ふ状態であつた」と。  
 デ、エ、ス、ミルは誰も彼が基督教に對し大賛成者でありとは思ふ事の出來ない人だが、彼が問ふて曰ふに「基督の弟子か或は從者中で誰が能くイエスの話された教訓や福音書中に描かれた彼の如き人物や品性を創造し得る者があるか、勿論ガリラヤの漁夫には出來ず、尙更に基督教の原始時代の著者等に於てをや」「自然界に對する論文」と。ルーソー（エミール第二卷）も論じて云ふに「ユダヤ人等には到底斯る調律や斯る道德を創造する事は出來ない、さすれば斯



る大创作者は創造された人物よりも更に不思議なりと云はなければならぬ」と。是で事自ら明かなりだ。若しシェクスピアが彼の作品を書いたのでなく、ベーコンが書た者であるならば、ベーコンはシェクスピアよりも更に偉大なる天才なりと云はなければならぬ。

福音書の基督の様な基督を創造した人は基督の如く充分驚嘆すべき人で神の如しと云ふべきだ。

以上説明し來つた所よりして、或る人は多分此の結論に達するであらふ、即ち基督は絶世の偉大なる人格者には相違ないが、其以上ではないと。斯る考を持つ人々の忘れてならぬ事がある、其は若し基督の語られた御言葉の多くが眞實其通りでないとするれば其こそ基督の

描寫は全然信を措に足らない、従つて其描寫より受る吾人の感想は拾收し得ない混亂に陥るに至る事である。即ち直接、間接に基督の神性に關する彼の教訓を指すのである。

一個の人間即ち人が、其心謙遜であつて然も知慧は深く且つ眞實なる人が、如何なれば自らを稱して神の子と稱へらるゝであるか、其神子たるや神の受肉化身を指すに於てをやだ。是の重大な點で、ルナンや、レオ・トルストイ伯や其他の人々は答へて、基督は其の様な意義で自らを神だとは一度も申されずと主張する、のみならず其と正反對に基督は自分の人間性を高潮せんが爲めに「人の子」と云ふ名稱を用ひられた。其れ故「神の子」と云ふ名稱は吾人と等しき人と



云ふと同様で人間の内に於ける神性がキリストに於ては只其最高の發達の域に進んだに過ぎないといふのである。此議論の證據として常にイエスの御言葉が引照さるゝ、其は彼がキリスト、神の子なりやと尋ねられた時、イエスは逃げ口上として、「爾曹が云へる如く我は是なり」と申されたのだと云はれる。ルナンやレオ・トルストイの徒は何等の定見なく是の說に盲從してゐる、従つて吾々はイエスは御自身神の子たりと一度も申されなかつたと云ふ事を衆知の信念としてゐる人々に遭遇することになる。

然し眞理は其正反對にあるのだ。諸福音書が皆同様に、キリストが判然と神の子であると申された事實を認定して居る。勿論、イエ

スは度々御自身を「人の子」と呼ばれた、其は彼の人格の人間の方面を高潮せられたのだ。然し其と共に、直接間接に、幾度も御自身神の子たる事を斷言せられた。質問者に對して爲されたイエスの御答が時に或は遁辭的に見へるものがある。現にイエスがユダヤ人の王なりや如何と尋ねられし時「汝の言の如し」とか、或は祭司の長が、汝は神の子なりやと尋し時、イエスは「汝等が云へる如し」と答へられた。其れは説明するに何の困難もない、なるとなれば、ギリシヤ語及びラチン語には「然り」、「否な」と云ふべき特殊の言葉がない。其故「汝の云へる如し」と云ふ言葉は肯定的返事に用ひらるゝ普通の形式なのだ。然し、キリストが遁辭的に見ゆる様な言葉を



常に用られたのではない。馬可傳第十四章を見ると（六一、六二）、祭司の長が儼然として「汝は頌むべき者の子、キリストなりや」と尋問した時にイエスは斷乎として「我はそれなり」と答へられ更に附言して、「人の子大權の右に坐し天の雲の中に現れ來るを爾曹みるべし」と云はれた。此以上正確で明白な答辯が得られ様か、「人の子」とは一體誰を指す言葉であらう、云ふ迄もなく普通人間同士に適用さるゝ者ではない。理性や良心の閃きを成分なりと持てるものには、誰人でも斯る言葉で自分の事を云ひ得る者ではない。

是の句の事を考へれば、三福音書は共にキリスト自身「人の子」が權威と大なる光榮を持つて天の雲の中に現るゝことを示して居る

事は勿論である（馬太傳二十四章二七—三〇、馬可傳十三章二六、路加傳二十一章二七—三六）。ダビッド、ストラッスはいや／＼ながら是の事を記したが終りに是の句の意義を説明する事が出来なかつた。

キリストが御自身の事に就いて申された事が此の問題には非常に重要なものである故に他のイエスの御言葉を参考に供したく思ふ。「われ彼等に永生を賜ふ彼等いつまでも亡びず亦これを我手より奪ふ者なし」（約翰傳十章二八）、「イエス彼に曰けるは我は途なり眞なり生命なり人もし我に由ざれば父の所に往くこと能す」（約翰傳十四章六）、「我と父とは一なり」（約翰傳十章三〇）、「是すべての人をして



父を敬ふ如く子をも敬はしめんが爲なり子を敬はざる者は之を遣し  
 父を敬はず」(約翰傳五章二三)、「蓋わが名の爲に二三人の集れ  
 る所には我も其中に在ればなり」(馬太傳十八章二〇)、「イエス彼等  
 に曰けるは誠に實に爾曹に告ん我はアブラハムの有ざりし先より在  
 者なり」(約翰傳八章五八)、「父よ今我をして爾と偕に榮を得させ  
 給へ即ち創世より先に爾と偕に有し所の榮を得させ給へ」(約翰傳十  
 七章五)、「又われ爾曹に告ん我を人の前に讖と言ん者をば人の子も  
 亦神の使者の前に之を讖と言ん」(路加傳十二章八)、「我は復還なり  
 生命なり我を信する者は死るとも生べし」(約翰十一章二八)、「天の  
 うち地の上の凡の權を我に賜れり……夫われは世の末まで常に爾

曹と偕に在なり」(馬太傳二二章一八一—三〇)。キリストの語り給へ  
 る是等の御言葉は慥に彼が神性を證明された者である事をユダヤ人  
 が了解した事は彼等の答辯で解る、即ち「ユダヤ人こたへて曰ひけ  
 るは石にて撃んとするは善事の爲に非ず爾たゞ褻瀆ことをいひ且な  
 んち人なるに己を神となすによりてなり」(約翰傳十章三三)。祭司  
 の長がその衣を裂き曰けるは「その褻瀆たる言は爾曹も聞る所なり  
 爾曹如何に意ふや彼等舉てイエスを死に當るべき者と擬たり」(馬  
 可傳十四章六三)。若し是等の言葉が是以外の意義のものならばキ  
 リストは御自身を辯護なさるに何の苦もない程易々たる事であつた  
 のだ。



福音書より引照し來れば更に尙ほ澤山の語句があるが既に引照した丈でもキリストが如何に御自身を觀られたかを識るに充分である。或る人々は到底キリストに賛意を表する事が不可能である者でも是丈の事實は否定する事が出來ない、即ちキリストの神の子たる意義は彼の人格に於て神の化身受肉なされた事をキリストが判然と主張せられた事だ。

吾人がキリストに關し彼の品性、論議、行爲に就て識り得る限を綜合すると終に最後の斷案に到着するのだ、「彼は一體誰なるか」。是の問題を愈々深く考慮し來ると益々解らなくなる。或人は主張してキリストは人間中の非凡なる天才であると。然し是の見解も不徹

底だ。正氣の人間が「我はアブラハムより先に在し」とか又は「我は途なり眞理なり生命なり」と自身の事を果して云ひ得るか。特に彼が王位に即き凡の改良するべき計畫を遂行すべき獨特の機會が與へられたるに係らず反つて之を犠牲にせるは通常人間の爲し得る所なりや（約翰傳六章十五參照）。約翰傳六章より八章中に見る如くキリストは特に自ら撰んで其機會を排斥し其が爲に衆望を失はれたのだ。且つキリストは近き將來に殺さるべき運命を自覺せられ乍ら、如何なれば榮光の中に天の雲に乗じて再臨せられ凡ての敵に勝ち給ふ事を言明せられたか（馬太傳二十四章三〇、三二參照）。又如何なれば自らを天の王なりと稱し將來生ける者と死ぬる者とを審判し給



ふと語り得るか（馬太傳二十五章三一—三四、路加傳二十一章三六  
参照）。

他の論者は主張して云はん、吾人はキリストに於て理想的善人を  
觀る、彼は最高の徳を宣べ、萬人の幸福を求め、其が爲に迫害されし  
なりと。然れ共若しキリストが單に一個の人間たらば如何で彼を善  
人と云ひ得るか反て極惡の人と云はざるを得ない。傲慢無禮、虛榮を  
貪りし人で殊更に他人を欺き且つ可憐なる單純、輕信の信徒を困難  
と死に至らしめて尙且つ平然たる其殘忍、冷酷の人なりと云はざる  
を得ない（馬太傳十章一六—二三、路加傳二十一章一二参照）。

多くの人士は此困難なる問題を解釋して曰く、キリスト自身は彼  
の語りし事を眞實に信じたるも、彼は畢竟一個の昏迷せる妄想家な  
りと。是の議論を否定するには福音書に現はれたるキリスト人格を  
思考すれば其れで充分だ。シャツフ教授が云はるゝ如く「キリスト  
の常住の和氣と平靜、克己、謙遜、威嚴、と忍耐とは妄想家の特徴の凡  
ての點と正反對である。キリストの有し給ふ斯の如き精神即ち和平  
天の如く、新鮮空氣の如く舞、鋭敏劍の兩刃の如く、平靜然も毅然  
として常に自制せられた精神、是の驚異の人物が如何で自己の天職  
に就き根本的の誤解と恐るべき自己欺瞞を爲し得んや」。

勿論福音書のキリストを識る者は誰れ一人彼を狂人と思ひ又謀あ  
る欺偽漢とも認める者はよもやあるまい。然ば彼は誰であるか。



吾人がナザレのイエスの人格を考慮する事愈々深ければ其丈益々多く解らなくなる。若し彼が其主張の如く神の化身でなく單に一個の人間たりとせば否應なしに左の結論を首肯せずばなるまい、即ち彼は最高なる道德的傑物で然も最低級の似而非者、欺偽漢、亦最も偉大なる天才と共に最も野卑なる阿呆、亦極度の謙遜と極度、高慢の最も驚べき眞實と最も耻づべき二重人格と虚偽、亦最も不思議な心理的透視と同様な自己欺瞞、最大なる平靜其判断と行爲上の智慧と過度の誇大心との殆んど不可能な結合のものと云はざるを得ない。一言に云へば、彼は是の世のものならぬ鬼怪であらう。之れに反して若しキリストが自身と神性とに關し語られし所が眞實であるなら

ば彼の品性の凡ての特性が一致結合して超自然的の美と完全の優秀なる状態を現すに充分である。



### 基督は彼の時代と環境の産物なりや

誰れでも人間は其道德的知識的發達の重要な特性に於ては其時代の子であり其環境の産物である。無論有名なる大人物、非凡なる天才、假令ばプラトロー、孔子、釋迦、ゲーテ其他の如きは其時代の普通の位地を越て高く登り諸國民及歴史の全般に渡つて其影響を残すに至た。さり乍ら我等と雖も其時代の子供である。彼等の時代迄國民の意識中に潜伏して居つた觀念を彼等が如何に表現する様になつたかを説明し得る者だ。多分是の理由で彼等の感化が時代の或時期に

限られたり又は或る國民或ひは數千の國民丈にしか限るのであらう。

是の法則がキリストの場合何處迄適用さるゝかを觀るのは興味深い事だ。彼はモーゼの律法の命ずる通り此の事を行ひ人間の方面ではイスラエルの眞の子供たるを福音書により識る事が出来る。然るに其當時及以後のユダヤ教の最もよき代表的人物とイエスの間に如何程の隔があるかデイン、フアラ一のキリスト傳を讀んだ者はよく記憶して居るであらう、其當時の普通人と學者とが律法の死文字や教法師等の無数の教に如何に拘束せられたか、亦如何にユダヤ教の全見界がバレスタインの狭き國境中に制限せられたかを能く承知



して居らう。其當時の尤も進歩的の教師の一人で謙讓の徳高きヒレル師の如き平和の宣傳者として彼はキリストの先生であると或人々は推賞した程の人物であるが、尙ほ當時の偏狹なる神學思想に捕へられ現に傳統を尙ぶユダヤ人が安息日を破らずに其日に與へられた卵を如何に食し得るやに就き長い論文を書いた程だ。

是と比較して見るとキリストの神觀や聖書觀と云ふものが其深遠さや精神さが如何程相違してをるか。キリストの精神的自由と、其見界の廣大なるは如何にも驚嘆に價する。サマリヤの婦人に向ひ(約翰傳四章二一—二四) キリストが申さるゝ様「婦よ我を信せよ唯に此山のみならず亦エルサレム而已にも非ずして爾曹父を拜すべき時きたらん、……眞の拜する者靈と眞をを以て父を拜する時きたらん今その時になれり夫父は是の如く拜する者を要め給ふ、神は靈なれば拜する者も靈と眞を以て之を拜すべきなり」。敢て問ふ彼は何人より斯る根本原則を學ばれたか。安息日問題でモーゼ律法の眞意義を指摘し「安息日は人の爲に設けられたる者にして人は安息日の爲に設けられたる者に非ず」と申されたるは如何計の改革的思想を紹介せられた事であらう。又イエスが眞宗教とは外部の禮典や儀式を守るに存せず寧ろ神に對する心の内部の態度にありと喝破せられしも亦然り(馬太傳五章二〇、十五章八、二十三章二五—二八)。ユダヤ人の特質とも云ふべき國民の偏見より如何に驚くべき程自由なり



しや(約翰傳十章一六)。彼が弟子等に命じて諸國民を教へ、福音は只にユダヤ、サマリヤのみならず地の極迄に宣傳せよと語られたのは如何にも其見界の世界大である事よ。(馬太傳二十八章一九、使徒行傳一章八)イエスの弟子等が是の教を掌握するに如何計の困難を感じたか又現今と雖も果して幾人か能く是意義を理解し得るや。

キリストは抑も誰からは是の智慧と彼の世界大の識見を得られたか。ハルナック教授は明白に指摘して曰く使徒パウロの文中には教法學者の感化が判然と顯著であるがキリストの御言葉中には何等其痕跡だも發見し得ない、更に語つて「キリストが教法師から何物をも學ばれざりしは極めて明白である」と。

然らば現代に至つても尙ほ不思議に思はるゝ其深さ又廣さを何より得られたか、此の點に於て古今の宗教開祖中漸然群を抜いて居るのだ。僅に三十歳の「是の若いユダヤ人」は如何にして全世界(其中にはエスキモーやインド人もあれば黒人もモンゴリヤ人も居る、亦歐洲人もアメリカ人も居る是の世界)に於けるキリスト教界の開祖となられたか。僅か三年間の短日月の傳道で全時代、諸國民、諸階級中の最もよき人々を指導し得る目標となれたのは抑も如何なる譯か。ナザレがキリストを産出し得ると思ひ得るか。

パレスタインがキリストを産せずとも或はギリシヤやローマの文明文化の感化に據たのではなからうか。ハルナック教授の云ふに「ギ



リシヤ語がバレストアインに於て廣く行はれたるは尙ほ現今フィンランドに於けるスウイデン語の如き有様なりしが、然し基督の人格と其論議より觀るとギリシヤ文明とは全く没交渉である」と。同様の事が基督に對するローマの文化に就て曰へるのだ。基督の教訓が全然宗教的性質のものたるは敢て説明を要しない。ローマ、ギリシヤ、カルデヤの宗教觀と云ふ者は多神教と偶像とでキリストの教とは全然正反對である。

然乍らキリスト教訓中に佛教の感化がありはしないだらうか。吾人は屢々、特に黄色新聞の論說などに能くある事だがキリストは若くして印度に學び其結果彼は或る部分の思想を印度で得たといふ説

に遭遇する。是の論は全然假設に過ぎないもので其を庇ふ證明の幽かなる影もあり得ない。ロシヤの諺にある様に「新聞はドンナ事でも云ふ者だ」。勿論佛教の或る教義は實に立派なものでキリストの教訓と相似て居る、假令ば、犠牲の教や隣人を愛する事や、善行や各自互に同情を深くする事など多くある。然し是と同時に忘れてならない事は、斯る道德法は、普遍妥當律で各國民中共通の者である、其律法は各國多少の相違はあれど元來普遍的の人の徳と云ふて差支がない、只インドの大教祖が其徳を高調したのだ。斯る道德に就てはキリストの教と佛教との間に軌を一にする者あるは慥な話だ。然る他の點に於てしかも第二位のものでなく是も根本的主要點に於て釋迦の



教はキリストの其に正反對である事を忘れてはならぬ。佛教の世界觀は純然たる無神論の立場で、彼が人生歸趣の思想は自滅觀で、人類の理想は沙門の生涯を送る中で彼が最高の熱望は存在を停止するにあるを記憶すれば其で充分だ。是の死滅の宗教と「我は復生なり生命なり」と宣給ひし人、然も是の世に於ても彼の世に於ても愛の神なる天父と平靜なる喜ばしき靈交をなし得る者たる事を教へた宗教とは、根本に於て相容れない者たるは識者を俟でもよく解る事だ。云ふ迄もなく茲で兩教の優劣論を爲す積は少しもないので、只兩教が斯の如く其根本的問題に於て相違して居る以上些細な點の類似點を云々するは勞して功尠しと云へば其で事足ると思ふ。

現今屢々耳にするはキリストの出生の記事と釋迦の其と著しく共通點のあると云ふ事だ。其類似の甚しき逆も偶然の暗合とは見られない。佛教經典中にある一二の例を擧ぐれば、釋迦の生るゝや天上の驚くべき奏樂が聞へ、諸王が其嬰兒に高價な贈物を捧げ、亦老僧が彼を抱いて凡の罪より人を救ふ救世主とあがめた。又水の洗禮を受け、野に於て惡魔に試みられ、亦母の名をマイブと云ふ。斯る類似は偶然とは多分云ひ得ない。然し茲に不思議な事には佛教の使徒等は釋迦の純然たる教義の保存地たるセイロン島に於ける南方佛經經典中には以上引例した傳説の事實に關ては黙して語らない。記載されて居るのは北方佛教經典に過ぎぬ。其經典はチベット及びモン







今茲に研究しなければならぬ問題はキリストは實際死より甦られ  
たかどうかと云ふ事だ。

是の問題が如何に大切なる者たるかは敢て言明を要しない。若し  
キリスト死より甦り給ひしならば、彼は吾人の如き死ぬべき人間で  
ない事丈は慥である。若し甦らなければ勿論彼は人間であつて神の  
化身などではない。若し彼が甦らないならば凡て彼が爲した奇跡の  
眞實を疑ふべき最も強い理由がある。若彼が甦りしならば其こそ凡  
の奇跡中の最大なる者で是に較べると新約聖書の他の奇跡は顔色な  
き有様であるから其等を信ずるには何の困難もあり得ない。使徒バ  
ウロがキリストの復活に對し如何に之を重大視したかは左の彼の書

いた言葉で判る、「キリストもし甦らざりしならば我儕の宣るところ  
徒然また再曹の信仰も徒然からん」(哥林多前書十五章一四)。ダビ  
ツド、ストラッスも彼の書た基督傳に於て是と同じ見解を發表した、  
「吾人は分水嶺に立てる者で即ちイエスの傳を自然の方法で説明せ  
んと欲する事を放擲するか、或は是復活の報告を超自然の助力をぬ  
きにして之を説明するか、二者其一を取らなければならぬ、孰れ  
にせよ是の問題は基督教の中樞經である」と。初代の基督者も是事  
實を同様に觀た、ペテロが最初の説明に於て語つて「既に神はイエ  
スを甦らせ給へり我儕は皆その證人なり」(使徒行傳二章三二)と  
曰ふて是の事を大膽に、確信と法悦とを以て全世界に宣言した。使



徒等の説教の有力な譯は實に茲にあるので彼等が到る所で吹聴したのは、只に基督教の教義や倫理のみでなく、何はさてをき、死より甦つた十字架に付けられし救主即ち生けるキリストの福音である。基督教の波及せし所先づ地中海の海岸より始め後には全世界に及んだが、其傳道の教の中心點は實に甦り給ひし主イエスを信する信仰である。其故に凡ての時代を通じて基督教の敵が全力を傾注して使徒等の肝要な是根本の教を覆さんとし或は破壊せんと努力するは敢て怪むを要しない。

基督の復活の事實を否定せんとする種々な學説を三の重なる部類に別つ事が出来る。

先づ茲に第一に擧ぐる假設に従へばキリストは十字架上に於て眞に死去されたのではなく只昏睡状態に陥られたので、葬られた冷き洞穴の中で其後蘇生されたと云のだ。

是の説を主張する者は指摘して云ふに、キリストの十字架上にあつた時間は僅少なものであるから其短かい時間では死ぬる者ではない。其證據にジョセフアス、フラビヤスの話が持出さる。其によると、彼が戦争から歸り來ると彼の友人三名が他のユダヤ人等と磔刑に處せられて居るのを見て驚き奔走の結果で彼等を十字架上から取り降した。可なり長い間十字架に懸られて居たが其内の一人が終に蘇生するに至たと。所がダビッド、ストラッスは此の説の曖昧なるを



指摘して口さがにも、若し磔刑に處せられた三人に息がありとして只其中獨り丈親切な介抱でヤット蘇生したならば介抱もされず、生きてる様子もなき者が蘇生するなどあり得べからざる事だと、云つた。約翰傳によると一兵卒がキリストの肋骨を刺し、馬可傳に是刑場に臨檢したローマ軍隊の百夫の長がキリストの死せられた事を證明された。ピラトはキリストが斯る短時間で死んだと云ふ報告を直に信じないで臨檢した百夫の長からイエスは髓に死せりと云ふ確報を受けて後始めて其屍を降す事に許可を與へたと云ふは無理もない。是の他更にダビッド、ストラッスが能く云ふた様に「不幸なる半死の受難者がヤットの事で墓から匍ひ出し十二分の静養を爲し更に其の

行衛も知れなくなつた後で其弟子等に彼が死と墓とに勝ちし者と云ふ印象を如何で起させ得るだらうか」と。シルトフ教授は（神人に對する感想）其書中に曰く「槍で刺れた足を持つ人が三日の後一哩以上の距離のあるエマオ迄歩けるものではない。醫學上の見地よりすれば十字架より降されて一ヶ月目で漸く自分の足の力で立ち得る位の者である」と。現今はキリストの死は虚偽であると云ふ説は科學上より觀て一顧の價もない様になつた。

第二説はキリストが十字架上で眞實死せる事を認めるが彼は死より甦たのではなく、彼の死後復活したと云ふ誤報が廣く宣傳されたのだと。是の僻説は極最初に起た者で其張本人宣傳者は實に祭司の



長等である（馬太傳二十八章一三一—一三五）。然ど若しキリスト甦らざりしならば彼の屍體は如何に、ドーして其が消る失せたか、其を取り去りし者は唯である、祭司の長やパリサイ宗の連中でない事は云ふ迄もない、ストラウスの能く云ふた様にキリストの復活の噂が廣がり始めると第一に其屍骸を出して而て其噂を止める事が出来たであらう。キリストの復活の報を造るに一番不賛成を表した者は實に彼等で、其報知を抑壓するに此の事を爲た者は反て彼等である（馬太傳二十八章一二）。又ローマの軍隊の兵卒がキリストの屍を盗み去た者でもない、第一彼等は斯る事件には全然無關心で次にローマの軍隊の軍律は極めて嚴重であるから若し監視に附せられた屍體が紛失

すれば彼等は死刑に處せらる。べき者であるキリストの直き弟子以外に屍を盗んだ者はない。左ればキリストの復活は弟子等が盗み去てキリスト甦れりと宣傳したと云ふ事になる、然しさうすると茲に問題が起て来る。其はキリストが死より甦たと云ふ考が如何にして弟子等の心に起て來たかと云ふ事になる。キリストの殺さるゝ以前弟子に度々死の切迫せる事と甦の件に就て話されたが彼等は反つて感つてキリストの御言葉の眞意を會得しえなかつた。（馬可傳九章一〇、三一、三二、路加傳十八章一三、一四）約翰傳に於てはキリストの死後三日目でも弟子等は尙ほキリストが聖書に従ふて死より甦る事を了解し得ずにあつた（約翰傳二十章九）。それともユダヤ人と



してキリストの復活を信じ之を識る事の極めて不可能な斯る考が三日目で忽然と浮び來り、其が偽りと知り乍ら尙ほ其を信せんと欲したと云ふ事が一體あり得ようか、若しありと云はゞ吾人は必然に尠くとも弟子等の幾人かは故意に嘘言を弄し且つ欺偽を行つた者と云はざるを得ない。

弟子等は其でよいとして他の人々が如何にして魅を信するに至つたか。キリストの母と兄弟等が彼の魅を如何に信する様になつたか。彼の兄弟等はイエスの生前彼を理解しなかつた、況んや欺偽の爲に信するに至る事は出來ない。使徒パウロの如き賢明な獨立的思想家や其他の多の人々が如何で虚欺を信じ得べきか。其様な欺偽が如何

で年月の鑑識に堪へ得べき。自然に起り來る問題は愚直なガラテヤ湖畔の漁夫が如何にして深く慮り大膽に虚言を吐き一度たりと心配の様子もなく一生涯其を固持する程の立派な役者になり得たか。彼の弟子等の内で只の一人でも斯様な欺偽に反抗する者がなかつたと云ふ事が實際あり得べきか。虚偽と云ふ者は早晚暴露する者だ、特に斯る傍若無人の件は長く解らずに居る者ではない。加之、斯る欺偽により使徒等は何を得んと希望するか、キリストの復活の傳道は只輕蔑と迫害と打撃と不斷に艱難と殉教者の死をかり得るにすぎない。ハルナックとストラウスは兩人共何の躊躇なく弟子等の眞實なるは何等疑の餘地なきを明言した。



残るは第三の説、「精神錯誤説」といふ者で弟子等は復活せる主イエスを観たと想像したと云ふ推測に立脚してをる。ルナンの如き學者等は特に重を「ヒステリー性質」にをいてゐる、彼等はマグダラのマリヤに就て復活の物語は重にマリヤより起つたと主張してゐる。ストラウスの如き他の一層眞面目な批評家は説をたて、云ふに、彼等の「興奮した状態」が原因となり弟子の幾人かゞキリストの幽霊を見た、其で他の弟子等も其を観たと想像する様になつたと此説を一層尤もらしくする爲に、ストラウスはさらに推測してキリストの磔死後弟子等は聖書の研究を始め甦の考を惹起すに至つた、其には多少時間がかゝる爲めストラウスはキリストの甦の報知が三日目

に起たと云ふ事に疑念を抱き、其最初の知らせは多分後世に起たものと想像した。是の説を調ぶるに當り注意すべきは、以上の學者等が弟子等を描た様にソー云ふ風な神経質でヒステリーの人物で彼等がなかつた事だ。彼等は強健な常識ある漁師等で神経衰弱に罹て居たのではない、亦他人の夢幻などを容易に信じ得る者でもなかつた。加之、當時彼等は興奮などの騒ではなく反て其反對に悲の爲に打萎れ彼等の愛師の復活など豫想もしなかつた。斯る沈痛な神氣沮喪から法悦に満た確信と變化し其以來彼等の死ぬ迄其確信が確乎不拔の状態にあつた事を如何に説明すべき者か、是確信が弟子等より他の數千人に傳播され多の男女は是が爲め恐れずに殉教者の死を遂ぐる



に至つた。

福音書に據れば當時の時日の順序は大抵左の如であつた、最初安息日の朝早く數名の婦人が墓參に詣で其墓が空虚なるに氣が付いた、而て天使が彼等にキリストは死より甦つた事を語つた（馬可傳十六章二一六）、彼等は痛く驚き馳せ歸て之をペテロとヨハネに告げた。そこで彼等が墓に走て其中の空なるを觀た（約翰傳二十章二一〇）。

是後にキリストはマグダラのマリヤに現はれ（約翰傳二十章一一一七）、其からシモン・ペテロ（路加傳二十四章一三）と他の使徒等に二度（約翰傳二十章一九―二六）、五百人の弟子等が一緒に集つた時

（哥林多前書十五章四―六）に現れ、其後ヤコブに現れ亦ガリラヤに於て弟子等（馬可傳十四章二八）に現れ神の國の事に就て四十日間彼等に話された（使徒行傳一章三）吾人は之に由り多くの人々が一ヶ月以上も甦れるキリストの現顯を觀た事を識る。其だから一二名の精神錯誤など云ふ事は問題にならない。吾人は四十日と云ふ永い間多人數で然も異た人々に同一な幽靈が其様に判然と顯らかに度々見へると云ふ事が事實あり得ると思へるか。若し吾人の内誰なりと妖怪を見るときか、或は判きりした夢を見るとすると直に正氣に立歸り其が夢であつて本統の者ではなかつたと云ふ事に氣がつくものだ。所が是幽靈は其現顯するや陰影でもなければ亦雲霧の如き形でもな



い、手を以て實際身體に觸るゝ事を許された（約翰傳二十章二七）、而して明晰な驚嘆すべき言葉を出された（約翰傳二十章二十一章）、就中、彼の重大なる任命は到底ユダヤ人等の工夫し得らるゝ者でなく、萬世を通じ其がキリスト教會の傳道的活動の標語となるに至た（馬太傳二十八章一九）。決して弟子等の欺偽や彼等の虚偽などでは斯の如き驚くべき永久的の効果を納め得るものではない。其だからキリストの復活に就て福音書の記す通りを受けるよりも所謂「自然的な」解釋を信ずるには餘程の信仰がなければならぬと云ふ結論に我知らず達するに至る。

## 結 論

イエス・キリストの神性を否定する人々亦其を眞なりと信ずる者の双方共大多數の人士には矛盾がある。双方とも通例彼等が主張する立場から當然歸著せらるべき結論を看過する事だ。大抵の方は多分其等の結論に就て一度も眞面目に考た事があるまい、可否共に其及ばず影響が如何に大なるかを識れば驚くであらう、或方々は終局迄堅實な一致を持つ事を恐れる者もある、故意か無心か解らないが駝鳥の如く彼等の欲せない者を見ぬ様に其頭丈を隠す、寧ろ大膽に



眞向から我等の結論に打つかりよく之を評價し如何なる價值が其内にあるかを發見するのが更によき事で亦更に正直なのではあるまいか。若し最後の結論に何か悪い點があると解るならば其は取も直さず何所かに亦誰かの打算に誤謬のあると云ふ本統の證據なのだ。

先づ第一に現今では不明なれど將來の發見によりキリストは神の化身でなく即ち吾人の如く通常の人間たる事が明々白々に立證せられると假定せよ。

其立場より確かに歸著すべき結果は左の如き者である、

一、全世界を通じ凡の基督教國は過古十八世紀間死せる一名のユダヤ人を神とし崇め今尙彼を拜す、是點に於て基督教は世界歴史中

尠くとも最も驚べくき不可思議である。然るに是の場合如何にして天賦の才能と穎悟とを有する何百萬の人が容易に人の術中に陥り斯る不幸な妄想に迷ひこみしか亦斯る欺騙がよくも何世紀間其根底を動かさずに居られたかを思はねばならぬ。

二、イエス、キリストの人格が最も矛盾せる撞著に充實した者の如く見える、特に之を研究すればする程益々不可解に且つ不可能にキリストはなるのだ。

三、吾人は必然に新約聖書全體を排斥する事となる。何故に然るか、キリストの神性に關する部分を悉く削除して只其殘の者即ち彼が垂れた凡の教訓的、建徳的且つ慰藉的の教のみ保存せんとするか



何れにせよ新約書から使徒行傳を排斥すべきだ。何となれば是の書に始終キリストの魅の事が論せられて居るからだ亦使徒等の書翰の大部分も削除されべきだ。彼等はキリストをば神、主、及び活ける救主と崇め居るからだ。同時に凡て四福音書を棄つる必要が容易に解る、若しキリストが故意か或は無心で御自身神の化身なる事を語れる時其が即ち欺偽を宣言したのである事が證明されれば其で他の言葉は一も信を措くに足らないのだ。夫故に新約書全體を排斥する事が必要となる、従つて人々を迷はす傾向のある有害の本と認めなければならぬ。

四、そうなると吾等の精神的状態が最も憐な據所なきもとなる。

我儕は罪惡を犯した者だ、時折其を忘れて居るが其を打消す事は出來ない。吾人のうちには我等を奴隸とする肉慾がある。吾等は道徳上の理想はあるが其を現實にする事が出來ない。既に吾人自ら不安定であるから他の人々の精神的の必要の場合に之を助くる事は六つかしい。吾人の前途は絶対に空虚だ。

五、果て然らば福音書が過古及現在に於て一個人並に各國民の上に及ぼした善い驚くべき感化を如何に説明すべきであるか。一人のユダヤの欺偽漢即ち自を欺きし此ユダヤ人が短き三ヶ年の傳道で然も其が全然必敗に歸した者が如何なれば斯の如き世界的で永續的な有利の好果を收むるに至るか、何所にても之の福音が人の心に享け



らるゝと高慢の人は謙遜に、放埒な者は清くなり墮落した男女共に新なる神の靈能力より生れ更るに至た。抑も虚偽は人々を善良な一層幸福のものと爲す事が出来る者か、果て然らば眞理の此の結果を何と申すべき、福音書から世界に溢れ出た善の凡て莫大な量は虚偽の源泉より發したと云ひ得るか。

六、然らば凡ての時代と凡ての民族を通じ立派なるキリスト教男女の大多數の個人的宗教的の實驗が解決し難き謎となるのだ、ニュートン、バ斯卡ル、バステュール、ケルビン卿、ビロゴフ、ドストイエフスキー、ウラディミル、ソロビヨフや其他の有名なる科學者が何故にキリストを信じたか。斯る名士は皆な誤謬錯誤の感化を受けた者

と推定しなければならぬ、同様に多年間異教徒中に全身を捧げて盡力せる宣教師等も、往々彼等の身命を犠牲にして迄も十字架に付けられ甦れる救主福音を傳へたが彼等も亦同然と云はざるを得ぬ。現今の世界の學生青年同盟に就ても同じ事だ、十四萬の學生と四十ヶ國の教授等の同盟の根底はキリストを神の子と信ずる信仰にあるのだ。亦吾儕に近く親しき方で彼等の麗しき品性、正直な活ける信仰基督敎生活と行爲に對し吾人が滿腔の愛と尊敬を表する人々に對しても同様だと云はなければならない。彼等の生涯に新なる意義と目的を與へた者はキリストに於ける個人的の活ける信仰に外ならずと斷言するは抑も何故であるか。乞ふ茲に聖ピーターズブルグの前の



辯護士ビー、ジェー、グラッドコフ氏が福音書の註解の序文中に記した彼の實驗談を引用せんと欲す、

彼曰く「約四十年前、當時の知識階級を風靡せる不信仰の潮流に自分も押し流され多年無神論者となつてゐた。然乍ら神の信仰を失ふてからは内心に何か缺乏してをる事を感じた、自分の持た以前の信仰を亡くして我が内に苦しき空虚が在るのだ。唯物的の教は自分を満足さする事は出来ない、又其で我が存在の意義も我が周圍の世界の意義も理解せられなかつた。人生の此空虚、無希望及び無意義の觀が自分を獵て暫時沈思默考せしめ更に綿密に福音書を研究せしむるに至つた」新約聖書を研鑽して彼は終に聖書が本物である事が

堅く信せられた。彼は更に語を繼で曰く「茲で研究の途が終へた、自分は永い間失ふてゐた信仰の管内に入た、……自分は無神論の波浪が我を引き漂らつた所から今度は平和な海濱に達した、……自分は人生の意義を了解した、……自分は今迄徒らにたゞいた其戸が今は開かれた事を發見した、……自分は「凡て勞れたる者亦重を負へる者は我に來れ……爾曹其心に安を得ん」と云ふ言葉の深い意義が解た。……我はキリストに來て而て我を苦めた凡の疑問の解決を得た。……我は心中に平安を得た」と。彼も亦必然に誤解して居つた者と云はなければならぬ。

是迄、我儕は若しイエスキリストが只一個の人間に過ぎないとす



るなら其結果否應なしに肯定せざるを得ない推論の數點を調べた。之に反して若し我儕がキリストを神の子と認むれば其結果は如何になるか、二三考慮して見たい。何等かの方法で我儕はキリストが御自身に就て唱導された如く、我儕の様な普通の人間でなく即ち「肉體をとり給へる神」、「神の生み給へる獨子」、「世の救主」で眞實に在らせらるゝ事を確く信するに至たと假定せしめよ、斯る發見は如何なる結果を生ずべきか。

最初に乞ふ先づ我儕がキリストに就て讀んだり聞たりした所のもの皆悉く忘却し今始めて我身に於て福音を聞た人の位地に我儕ををかしめよ。我儕は幼少の時分から其を聞かされて馴れ子になり我

儕の感情は寧ろ愚鈍の状態だ。其故に初めて福音を聞かされた爲に受くる深厚なる感動が如何なるものであるかを容易に評價する事が出来ない。

「それ神はその生たまへる獨子を賜はごに世の人を愛し給へり此は凡て彼を信する者に亡ること無しして永生を受しめんが爲なり」(約翰傳三章一六)とし福音を初めて聞く時、キリストが如何に生活し、教へ、苦み、我等の爲に死して亦甦り給ひしかを聞く時、キリストは嘗て生存なし給ひしのみならず今も尙ほ生き給ひ、現に我等を招き給ふ事を聞く時、我等の靈魂は斯の如き愛と斯の如き犠牲の爲に衷心より鼓舞せらるゝは確實の事なりと信す。吾人は實際此のキリ



ストに關し知り能ふ限り十分に彼を識らんとする熱烈なる慾求の起り來るを思ふ、故に最も熱心に彼に就て教ゆる書物の研究を開始するであらう。

吾等は直に斯の如き事を會得する即ち不思議に重大な或る事件が起り其驚くべき出來事の結果は宏大無邊のもので、そう云ふ犠牲は無益の者とならず、而て勿論吾等の前に神と平和を結ぶ途が開かれ、現世に於て神と共なる事により清き聖なる有用の生涯を送り得る事が出來るに至る、眞のキリスト教は光明のある、幸福な、深く亦立派な或る種の者たる事では其は平素吾等が見慣れた如きこんな貧弱な有名無實の基督教と餘程異つたものであるといふ事だ。

單に外形的にキリストを承認する事や、凡ての宗教上の儀式祭典の形式的の遵奉や亦單に知識的の聖書と救の道とに關する識見の如きものでは到底キリストを喜ばしむ事も出來なければ又自己を満足さする事の出來ぬ事も判然と解らう。キリストの拂ひ給ふた様な偉大なる犠牲に對ては當然我等からも何か或者を捧げなければならぬ。吾人は直にキリストこそ實に我等の生涯を導き給ふ主であり亦立法者であらねばならぬ事を認めキリストの意志は神に對し、人に對し又自己及罪に對する我等の態度を決定せねばならぬ。多の信者の一致を缺く理由は實に茲にあるのだ。

吾人は眞實キリストの顯はし給へる如き愛に對し應答したい者だ



と云ふ最も熱烈なる慾求を感じるのだ、且つキリストを耻としない  
 で是地上に神國建設の爲め我等の有する天賦の力量を大膽に勇んで  
 キリストに捧げ自由に之を使用されん事を欲するであらう。最後に  
 至りて一言せん、よしや吾人のキリストを識る事の如何に制限せら  
 れた者にせよ、以上論じ來た様な問題に對し吾人が中立的態度を持  
 する事は到底不可能であるを熟知するに至る、其故公然に全力を灌  
 いでキリストを信奉するか或は飽く迄も斷乎としてキリストに反對  
 し彼を拒絶するか二者其一を撰ばざるを得ない事を識るであらう。

唯修也、松白然を、神の御心を!!

Printed in Japan

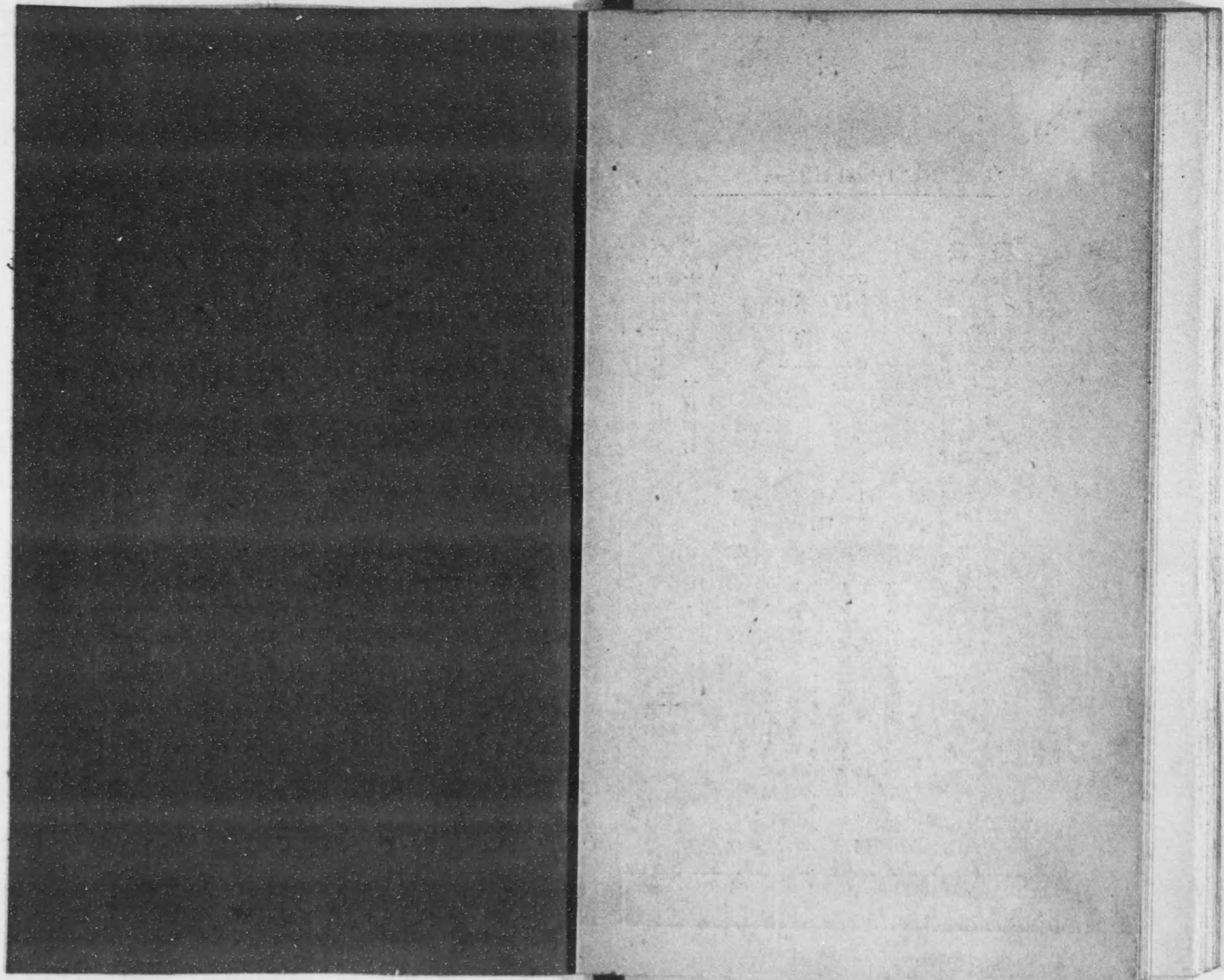
大正十四年四月廿八日印刷  
 大正十四年五月一日發行

(定價金五十錢)



譯者	田島進
發行者	東京青山隈田三十三番地 基督教興文協會代表者 エス・エイチ・ウエンライト
印刷者	東京市京橋區瀧山町五番地 渡邊吉郎
印刷所	東京市京橋區瀧山町五番地 中心堂印刷部
發行所	東京青山南町 七丁目一番地 振替東京 三七一三四番 日本基督教興文協會
發賣所	教文館・警 其他各書店 隆社・基督教書類會社・下關福音書店・







516  
311



終